2022年06月06日 中日新聞 朝刊 25頁

備える 3.11から

第200回 語り部・報道座談会㊤

どう伝えれば

座談会では名古屋大の福和伸夫名誉教授（65）がコーディネーターを務め、震災の語り部や震災報道を担ったテレビ、ラジオ、中日新聞の関係者が五月に本社で語り合った。二回に分けて紹介する。

■震災直後

福和 東日本大震災の直後、どう行動したか。被災地から近い順番で。

川崎 岩手県釜石市の釜石東中学校で二年生だった。部活動中に揺れがあった。すぐに津波が来ると思った。点呼を取りきる前に、先生の指示でまとまって高台に向かった。小学生と手をつないで避難する場面もあった。

福和 釜石東中は防災教育が有名で率先して逃げてくれた。

遠藤 盛岡市のテレビ岩手で報道部長だった。発生から三分後に緊急放送に切り替えることができた。二〇〇八年の岩手・宮城内陸地震ではそれに時間がかかり、悔しい経験をした教訓が生きた。放送で大事なのは反射神経。いかに早く多くの人に伝えるか。

福和 逃げるかどうかは映像の有無で変わる。

大嶋 新番組の打ち合わせで東京の超高層ビルにいた。ビルごと倒れるんじゃないかと思うぐらい揺れた。窓が割れて外に落ちるんじゃないかと。その後、宮城県女川町出身の知人から声がかかり、女川さいがいFM（現オナガワエフエム）を立ち上げた。それから十一年、発信し続けた。

米山 当時は兵庫県の淡路島で高校生。家でテレビを見ていた。阪神淡路大震災は津波がなかったので、現実じゃないような感覚。見ていて涙があふれた。

青柳 特派員として米ニューヨークにいた。起きていることが全く分からない。外報部のデスクに電話したら「大変なんだ」と切られた。長野県の両親に安否の電話しかできず、もどかしさを感じた。

福和 中日新聞はかなり早く飛行機を飛ばした。

寺本 災害の規模を知るために必ず飛ばす。地上からも記者を派遣する。当時は新幹線も止まり、北陸からまわった記者もいた。渋滞で大変だった。

いかに早く多くの人に

釜石の奇跡「美談」扱い違和感

福和伸夫さん（65）
名古屋大名誉教授

ふくわ・のぶお　名古屋市出身、愛知県日進市在住。清水建設勤務を経て今年3月まで名古屋大教授。専門は建築耐震工学、地域防災。愛知県内の防災対策などに取り組む。

遠藤　隆さん（66）
テレビ岩手

えんどう・たかし　東京都出身、盛岡市在住。テレビ岩手報道制作局報道特別プロデューサー。東日本大震災を記録した「たゆたえども沈まず」は2021年度の文化庁芸術祭でテレビ・ドキュメンタリー部門大賞。

川崎杏樹さん（25）
東日本大震災語り部

かわさき・あき　岩手県釜石市出身、在住。釜石東中2年の時に東日本大震災を経験した。2020年に同市の伝承施設「いのちをつなぐ未来館」の運営会社に入社、語り部活動を続ける。

米山未来さん（27）
阪神淡路大震災語り部

こめやま・みく　兵庫県淡路市出身、川崎市在住。会社員の傍ら阪神淡路大震災の語り部を続ける。2019年8月から毎月、ネットで語り部のライブ配信を実施。父親の正幸さんも語り部。

大嶋智博さん（48）
オナガワエフエム

おおしま・ともひろ　東京都出身、在住。テレビ、ラジオ番組の放送作家。宮城県女川町で臨時災害放送局の女川さいがいFM開設に携わり、現オナガワエフエム・プロデューサー。

中日新聞 青柳知敏 社会部長（54）

あおやぎ・ともとし　長野県松本市出身。1992年入社、名古屋本社社会部、ニューヨーク支局などを経て2021年より現職。02年に「東海地震特集（備える）」の第1回を担当した。

■さまざまな手段

福和 何を伝えようとしたか。

遠藤 大災害が通常と違うと感じたのは二日目ぐらい。通常はビフォーアフターの名前を伝えるが、阪神淡路大震災を経験したテスクが応援に来ていて「生きている人の情報が大事」と。避難所で名簿を撮り、それを伝えた。

大嶋 女川町でラジオを放送した。自宅を流された高校生らがアナウンサーに。一周りの人たちが喜びそうな情報を聞いて「私も流されたけど生きてるね」という話には反響がきた。インターネットで配信すると遠くの人が支援物資を送ってくれた。ラジオにはいろいろな役割があると感じた。

川崎 小・中学生が助かったということで取材対象になり、対応させられた。一番聞かれたのは「（助かったという）釜石の奇跡をどう思いますか？」。亡くなった方がいるのに、美談として奇跡と言われることに違和感があった。防災学習があったから助かったという背景を伝えたい、と思いながら話した。

米山 父親が阪神淡路大震災の語り部をしていて、幼いころから震災の話に触れる機会が多かった。大学進学で東京に出た時、二月十七日に友人との間で震災が話題にもならずショックを受けた。父が語り部を辞めたら、防災に力を入れようと思う人が途絶えると感じ、継ぐ決心をした。

たまたまインターネットでライブ配信をしていて、リスナーから夢を聞かれた時に語り部と答えたら「ここでやってみたら」と言ってくれた。会社員の傍ら月一回、語り部の配信をしている。ネットは全国、海外の方とも双方向で会話できる。

福和 対面で語り部をしているのが**川崎**さん。

川崎 中学三年の時、講演会や防災の講話をしたけど、相手によって伝わり方が違い、工夫が必要だと感じた。そういう仕事がしたいと思った。いのちをつなぐ未来館でガイドの手伝いをと声をかけられ、自分の経験を直接人に伝えることが最善だと感じて今の仕事をしている。

ネット双方向で会話

ラジオは寄り添うメディア

発生直後だけでなく継続

■救われた思い

米山 阪神淡路大震災の被災地では震災遺構がほとんど残っていない。語り部を高齢化、震災を経験した人でさえ「もう大丈夫だろう」と意識が薄れるのが早い気がしている。

福和 南海トラフ地震は揺れと津波の被害とされる。二つの震災の経験を次の被災地に残したい。

遠藤 新聞がうらやましいのは日々記録していること。テレビは映像が流れると終わるが、やっぱり残さないといけない。そこで昨年、ドキュメンタリー映画を製作した。冒頭に震災二日前と当日午前の映像を入れた。当たり前のまちが一瞬にして変わってしまう恐ろしさ。一瞬にして人生が変わることを伝えたいと思った。

大嶋 ラジオは寄り添うメディア。女川町では地元の人並みに声をかけられる中で聴かれるという得がたい体験をした。震災十年のくくりは地元の人には関係ない。全国のメディアは被災地の扱い方を考えた方がいい。

青柳 当時は海外にいたからこそ冷静に検証できる別の目を持って取材できると感じた。

寺本 災害の発生直後だけ行って書くというのはだめ。震災五、六年目には月一回、「五年目の被災地」という連載企画をした。われわれの原体験は伊勢湾台風。多くの人に救われたという気持ちが、防災報道に生かされている。

東日本大震災後、高台（奥）に住宅地が造成された宮城県女川町の町並み

寺本 中日新聞は震災から一年間で延べ百七十人の記者が被災地に通った。本紙が募った義援金は九十億円を超えた。一九五九年の伊勢湾台風の支援に返ししたいという読者の気持ちがあった。しっかりと被災地の現状を伝え、読者の目となり耳となることが私たちの仕事だ。

座談会の続き（後半）は6月7日付朝刊に掲載します

101 防災訓練
102 携帯電話㊤
103 携帯電話㊦
104 避難勧告
105 地震火災
106 活断層
107 高層難民
108 阪神20年㊤
109 阪神20年㊦
110 液状化
111 土砂災害
112 震災4年㊤
113 震災4年㊦
114 帰宅困難
115 会社を守る
116 避難所㊤
117 避難所㊦
118 要援護者
119 都市の豪雨
120 要援護者
121 避難生活
122 心のケア
123 治安対策
124 離島の津波
125 震災5年
126 後方支援
127 住宅耐震化
128 家庭の備蓄
129 予測地図
130 稲むらの火
131 行動計画
132 危機管理
133 教訓を語る
134 復興
135 庁舎の耐震
136 住宅密集地
137 津波の教訓
138 産業防災
139 津波防災
140 森の防潮堤
141 安否確認
142 ドローン
143 伊勢湾台風
144 豪雨予想
145 予知の転換
146 緊急速報
147 災害史
148 トイレ
149 地域活動㊤
150 地域活動㊦
151 住宅再建
152 土砂災害
153 都市防災
154 災害ごみ
155 ペット
156 停電対策
157 液状化
158 高台避難
159 伊勢湾台風
160 南海トラフ
161 地域活動㊤
162 地域活動㊦
163 南海トラフ
164 都市防災
165 非常食
166 避難情報
167 伊勢湾台風
168 避難体験
169 災害報道
170 情報伝達
171 商品開発
172 阪神25年
173 地域活動㊤
174 地域活動㊦
175 子ども支援
176 コロナ禍
177 復興とは
178 広域避難
179 東海豪雨
180 治水対策
181 学校防災
182 防災シンポ
183 震災遺構
184 教訓
185 各地の活動
186 清洲越し
187 震災10年
188 臨時情報
189 豪雨情報
190 盛り土
191 停電対策
192 気象情報
193 津波研究
194 新聞の役割
195 寒さ対策
196 防災道の駅
197 若者の活動
198 若手記者
199 自主避難所
第200回 伝える

長野での豪雨（第170回情報伝達）

熊本地震（第127回住宅耐震化）

寺本政司 編集局長 あいさつ

「備える 3・11から」の連載は十一年になる。この間も熊本地震や西日本豪雨などが発生。本紙の管内でも御嶽山噴火や長野豪雨などが起き、自然災害の脅威を目の当たりにした。

「歴史に学ばなければ歴史が教えにやってくる」。歴史学者としても知られた米国の故マイク・マンスフィールド駐日大使の言葉だ。過去の災害から学び、教訓としなければ再び訪れる災害に対処できない。被害を減らす方策や心構えを発信する災害報道はより重要になってくる。